2025年度一般入学試験問題

国　　語

（2月14日）

開始時刻　　午後1時00分

終了時刻　　午後2時00分

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子は18ページです。落丁、乱丁、印刷の不鮮明及び解答用紙の汚れなどがあった場合には申し出てください。
3. 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督員の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしてください。

   ①　受験番号欄

   受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしてください。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

   ②　氏名欄

   氏名とフリガナを記入してください。
4. 解答は解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、 10 と表示のある問いに対してⓒと解答する場合は、次の（例）のように解答番号10の解答欄のⓒにマークしてください。

   （例）

10	ⓐ　ⓑ　●ⓒ　ⓓ　ⓔ

5. 問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいません。
6. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

一

次の文章を読んで、**問一**～**八**に答えなさい。

私たちは情報と他者につねに接続されている。哲学者の谷川嘉浩は、これを「常時接続の世界」と表現する（谷川嘉浩『スマホ時代の哲学』、一一一頁）。暇さえあればスマホに目をやり、そのつど更新されるＳＮＳやメディアの新着情報を頭に流し込む。遠くの国の戦争、昔好きだった人の結婚写真、成功した友人の事業内容、環境に配慮した車、偏った思想、素敵なレストラン、既読の有無……。これらはすべて、画面上では、A同じレベルで扱われる。

脈絡がない断片的な時事ニュース、そんなに仲良くもない人たちの近況、知らない人が楽しそうに踊っている短い動画が目の前を流れてゆく。ぼーっとしながら動画をスワイプし続けるのは、ムイ（ア）な時間をやり過ごすためだ。何もしていないよりは、スクリーンを見ていた方が、気が紛れるからである。

サイバースペースのネットワークは、複雑に休みなく形を変えながら、出来事と出来事、人と出来事、人と人の間の「［X］」を可視化する。このネットワークに果てを感じることはない。その気になれば、どこまでもつながっていけそうだ。にもかかわらず、〈私〉の意識は妙にぼんやりとしていて、つながりの実感を持つことができない。それだけではなく、何かとつながっていることが一つの強迫観念にさえなっていて、脱接続する隙がないのである。これはB奇妙な状況ではないだろうか。

情報にアクセスできず、他者と知りあう機会がない。ネットワークがどこにあるのか分からない。ふつうは、こういう条件が私たちを孤立させて、つながりの意識を希薄にするはずだ。ところが、この社会で現れているのは、接続の過剰から出来（しゅったい）する疲労や孤独なのである。つまりそれは、つながっているがゆえの、逆説的な隔絶の意識だ。

起床から始まり、トイレ、三度の食事、通勤、待ち時間、そして就寝の直前まで――下手をしたら歯磨きやカフェで友人と珈琲（コーヒー）を飲んでいる間にさえ――私たちはスマホやタブレットを手放さない。仕事でパソコンを使用している人なら、一日のほとんどの時間、スクリーンに映る情報に晒（さら）されているだろう。

こういうことが当たり前になった日常の中で、私たちはふとした瞬間に異様な疲労感を覚える。誰とでもつながっているからこそ、形容しがたい孤独を感じる。そんな瞬間を、現代を生きている人なら、誰もが経験しているはずだ。しかし、Cどうしてこのような状況に陥ってしまったのだろうか。

それは、情報の生産と消費のサイクルがあまりにも短すぎて、単にそこから人間がソガイ（イ）されているからではない。あるいは、ＳＮＳがつくりだす人間関係が頼りない、ということでもない。その理由を端的にいえば、細かい情報の塵が山ほど頭に積もり、何かをゆっくりと立ち止まって考えるた

めの空き容量が不足しているからである。みんなにおいていかれたくない、というバクゼン*とした同調意識に支配されて、自分が何を欲しているのかを深く考えなくなっているからである。そして、〈私〉の不在。これが最も深刻である。情報に意味を与える〈私〉がいない。【①】

たしかに、テクノロジーは〈私〉が別様に存在する可能性を広げている。が、このことに相関して、むしろ〈私〉の存在の確からしさは、逆にしぼんでいる。【②】そうして、〈私〉はここに存在している、というリアリティを持てなくなっているのだ。すなわち、〈私〉から切り離された情報や関係性のネットワークだけが広がっている状態である。【③】

これを脱中心化したネットワークの在り方として肯定的に見る向きもあるだろうが、私の考えを言えば、それはネットワークを俯瞰したときに堅固な中心が見当たらないだけであって、生の内側から物事を見るなら、やはりすべての情報や関係性の中心にいる〈私〉の存在はどうやっても動かない。【④】〈私〉とその思考は切り離せない。何事も〈私〉が考えるのであり、考える際には必ずそこに〈私〉が存在するのである。

つまり、こうだ。私たちは世界の側を見すぎている。スマホのスクリーンを通して世界を見ることに一日の大半の時間を費やしてしまえば、それを見ている〈私〉を考えるための時間が無くなるのは当然だ。頭に余計なキャッシュ(注1)が溜まりすぎて、動作が重くなっている。こうして、世界を見ている〈私〉の存在を意識できなくなる。何を見たいのかも分からず、何が本当に必要なのかも分からない。【⑤】結果として、〈私〉は、それと気づかないうちに、［Y］に埋もれてしまうのだ。

しかし、以上の問題は、取り立てて新しいものではない。たとえば、カナダの哲学者マーク・キングウェルは、退屈とサイバースペース依存の関係を哲学的に分析しているし（『退屈とポスト・トゥルース』）、国内でも、先に言及した谷川が「常時接続の世界」における退屈や孤独の問題を詳細に論じている（『スマホ時代の哲学』）。また、私自身、欲望の不活性については、ニヒリズムとメランコリーをキーワードにして論じたこともある（『新しい哲学の教科書』）。

［Z］

（岩内章太郎『〈私〉を取り戻す哲学』による。設問の関係上、本文を改めたところに＊を付した。）

（注）1　キャッシュ――元々はコンピューター用語で、一時的な記憶領域にあるデータのこと。

問一　傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが［1］、イが［2］、ウが［3］。

ア　ムイ

ⓐ ケイイを表する
ⓑ イセイ者としての自覚
ⓒ イロウ会の開催
ⓓ 学級イイン長になる
ⓔ 地球のシュウイ

イ　ソガイ

ⓐ 民事ソショウを起こす
ⓑ 人類のソセン
ⓒ 法律のソキュウ適用
ⓓ 引っ越してソエンになる
ⓔ ソゾウを製作する

ウ　バクゼン

ⓐ 突然のバクハツ
ⓑ ソクバクされる
ⓒ バクダイな予算
ⓓ 不正がバクロされる
ⓔ 広大なサバク

問二　傍線部A「同じレベル」の説明として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、［4］。

ⓐ 私たちの興味に関係なく、どの話題も端末に表示される情報という点で等しい性質を有している。
ⓑ 利用者にとって最適な情報が選ばれる機能により、似通った話題でスマホの画面が埋め尽くされる。
ⓒ ネットへの接続により、時事ニュースから新商品の広告に至るまで異なるジャンルの情報が同様に取得できる。
ⓓ テレビや新聞とは異なり、様々なメディアのコンテンツを同じ画面で視聴することができる。
ⓔ 画面上の情報は万人に公開されているという点で、原理的には誰もが同じ経験を得ることができる。

問三　空欄 X に入る語として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 5 。

ⓐ　情報格差
ⓑ　むなしさ
ⓒ　つながり
ⓓ　リアル
ⓔ　断絶

問四　傍線部B「奇妙な状況」の説明として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 6 。

ⓐ　人間は他者と常につながりたいと願っている一方、脱接続したいという矛盾する願望が生じている状況
ⓑ　つながりが私たちを安心させるはずが、継続的な接続が結果として真逆の感情を生じさせている状況
ⓒ　今までは不可能だった遠距離での接続が可能になったが、身近な他者との関係は希薄化している状況
ⓓ　情報にアクセスすればするほど、知りたくない情報も目に入るようになってしまうという状況
ⓔ　自ら進んでネット接続しているはずが、いつの間にか受動的な行動へと変化している状況

問五　傍線部C「どうしてこのような状況に陥ってしまったのだろうか」に対応する理由として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 7 。

ⓐ　多忙な日々のなかで考えることを放棄した結果、情報を消費するだけの〈私〉に成り下がってしまったため。
ⓑ　最終的には〈私〉が判断すべき情報であることを忘れ、目の前の情報に流されるような浅い思考に陥ってしまっているため。
ⓒ　情報を処理する主体が〈私〉を見失い、情報を得る目的を自覚したり思索したりすることができなくなっているため。
ⓓ　人間に本来備わっていた「考える」という営みを怠った結果、〈私〉という存在が何かが分からなくなってしまったため。
ⓔ　〈私〉という情報を取り込む主体が他者に浸食された結果不在となり、考えることすらできなくなってしまったため。

問六　次の文は、本文の【①】～【⑤】のどこに入るか。最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 8 。

認識者なしの認識はありえない。

ⓐ【①】
ⓑ【②】
ⓒ【③】
ⓓ【④】
ⓔ【⑤】

問七　空欄 Y に入る語句として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 9 。

ⓐ　スマホのスクリーン
ⓑ　溜まったキャッシュ
ⓒ　〈私〉とその思考
ⓓ　ネットワーク
ⓔ　世界の側

問八　空欄 Z には、次の①～④の各文が入る。正しい順に並べるとすれば、どれが適切か。次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 10 。

① それだけではなく、ＳＮＳやメタバースが普及する中で、退屈、疲労、孤独、〈私〉らしさといった主題が出てくること自体に、おそらくそんなに目新しさはなく、言ってみれば、それはある種の一般通念でさえある。

② たとえ問いが立っていても――その問いが根本的なものであればあるほど――答えを導くのは簡単ではないからだ。

③ つまり、すでに材料は出揃っている、と言っていい。

④ だが、テーマが新しくないから、その問題は終わっている、とは言えない。

ⓐ ① ↓ ③ ↓ ② ↓ ④

ⓑ ① ↓ ④ ↓ ③ ↓ ②

ⓒ ② ↓ ③ ↓ ④ ↓ ①

ⓓ ③ ↓ ① ↓ ④ ↓ ②

ⓔ ④ ↓ ② ↓ ① ↓ ③

二　次の文章を読んで、**問一**～**七**に答えなさい。

この章の目的は、法学、社会学、そして政治活動の現場において議論されてきた、ヘイトスピーチにまつわる見解を吟味したり、具体的な事例を解説したりすることではありません。以下では、あくまで、言語哲学の観点からヘイトスピーチ一般に関していくつか論点を提示します。しかし、まず述べておきたいのは、ヘイトスピーチは［X］のいる深刻な社会問題だということです。「ヘイトスピーチ」そして「ヘイトクライム」(注1)ということば自体は近年になって人口に膾炙(かいしゃ)したとしても、差別と排外主義は常に日本国内に存在し、ヘイトスピーチとヘイトクライムの被害は繰り返し生じてきました。*したがって、私たちの最大の関心事は、いかに被害を食い止めるのかという点にあるべきであり、現象そのものへの理知的関心は二の次、三の次であるべきでしょう。ただ、ヘイトスピーチという、私たちの言語使用の中でももっとも醜悪かもしれない側面を、言語哲学が無視するわけにはいきません。そして、それが一体何なのか理解することは、その被害を抑える方法を考えることにわずかばかりながら貢献できるでしょう。

†［Y］

第5章において、誰かを罵る・罵倒するという言語行為の中心的機能は、その人物を自分より低く位置づける、ランクづけすることだと主張しました。このランキング概念にもとづいた罵倒の理解は、ヘイトスピーチにも拡張できると思われます。ランキングは、何かに順序関係を押しつけることにより成立します。抽象的なランキングの構造という観点からは、その何かが個人であっても（Aさん＞Bさん）、集団であっても（A集団＞B集団）同じことです。そして、総称文(注2)に関する第7章にて詳しく見てきたように、私たちは個々人についてだけでなく、人間の集団について一般化を行い、本質主義的に語ります。

話者のAさんが「A人」という（それが科学的に意義のある分類かはともかく、一般的にそういう集団があるとされている）集団に属しているとします。Aさんが「B人は危険だ」「B人は犯罪者だ」と「B人」の集団について（総称文を使いあいまいに）述べたとします。Aさんがただちに「A人も危険だ」「A人も犯罪者だ」などと付け加えない限り、Aさんはおそらく、「A人はそうではない」と考えていると想定できるでしょう。つまり、話者は集団的に、犯罪を犯す傾向性や危険度について「A人集団＞B人集団」というランキングを提示していることになります。さらに、第7章での議論を踏まえると、Aさんは、単に数量的な計測値を述べているだけでなく、このランキングは生物学的、あるいは文化的な原因をその根拠として持つ、とシサ(ア)しています。

ヘイトスピーチのさまざまな側面が、このランクづけるという根本的機能から派生的に理解できると私は考えます。ここでは二点だけ指摘したいと思います。ひとつ目は、ランキングの存在は暴力や差別の「正当化」につながる、ということです。「A人集団＞B人集団」という序列関係を成立させてしまえば、A人集団とB人集団への異なった取り扱いに根拠があることになります。たとえばB人集団が本質的により危険（と誤って認識される）ならば、その集団に属するメンバーをより危険視し、警戒する差別的制度や慣習が正当化されてしまうでしょう。

二つ目にとりあげたいのは、なぜ集団をおとしめる表現として、「ゴキブリ」や「ヘビ」といった、ヒト以外の生き物（「オニ」「悪魔」といった架空のものも含まれるでしょう）が使われやすいのか、という理由です。この理由も、ランクづけの観点から説明できます。第2章において、古今東西に共通して、私たちがキヒする単語の分類があるという見解を紹介しました。排泄物関連のことばや、害獣や害虫を指すことばは、強いイメージを喚起しますので、人をおとしめるために、そうした単語を用いるのは理解できます。しかし、単に集団と悪いイメージを結びつける、連想させるためだけにそうした語彙が使用されるのではないと思われます。

ゴキブリもヘビも、少なくとも一般的にヒト以下の存在としてランクづけされています。すでにランキングが存在するわけです。すでに存在するランキングを利用すれば、新しく苦労してランキングを作成したり、ランキングの存在を説得したりする手間が省けるのです。ヒト以外の生き物を指す表現を使い、特定の人間集団と既製のランキングを結びつけるのは、ランクづけを成功させるという（ Z ）観点から見れば、非常に有効な手段だと考えられます。

（和泉悠『悪い言語哲学入門』による。設問の関係上、本文を改めたところに＊を付した。）

（注）　1　ヘイトクライム――人種・宗教などに対する偏見や差別に基づく憎悪による犯罪。憎悪犯罪。

2　総称文――「恐竜は絶滅した」「ブタは四本足だ」のように、個々のものではなく、一般にそうだということを述べた文。

問一　傍線部ア、イの漢字と同じ漢字を含むものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 11 、イが 12 。

ア　シサ|

ⓐ サギをはたらく
ⓑ 仕事のホサ|
ⓒ 人事のサハイ
ⓓ データをセイサする
ⓔ 犯罪のキョウサ|

イ　キ|ヒ

ⓐ キ|ガイを加える
ⓑ キンキ|を犯す行為
ⓒ 実力をハッキ|する
ⓓ ハイキ|された書類
ⓔ 社会へのキ|ヨ

問二　空欄 X に入る語句として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 13 。

ⓐ 実行者
ⓑ 賛同者
ⓒ 被害者
ⓓ 犠牲者
ⓔ 傍観者

問三　傍線部A「人口に膾炙した」の意味として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 14 。

ⓐ 人数が増えた
ⓑ 多くの人に知られた
ⓒ ある程度の話題となった
ⓓ 人が意図的に操作した
ⓔ だんだんと減ってきた

問四　空欄 Y には、以後の文章の小見出し（キャプション）が入る。最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 15 。

ⓐ　ヘイトスピーチの分類
ⓑ　ヘイトスピーチと人間集団
ⓒ　ヘイトスピーチに使われる言葉
ⓓ　ランクづけとしてのヘイトスピーチ
ⓔ　個人へのヘイトスピーチと集団へのヘイトスピーチ

問五　傍線部B「第7章での議論」とあるが、「第7章　総称文はすごい」の章では、どのような議論があったと推察できるか。最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 16 。

ⓐ　総称文は、集団の数量的な値を述べている文である。
ⓑ　総称文は、生物集団の特色を述べた文である。
ⓒ　総称文は、集団には文化的な原因がないことを述べた文である。
ⓓ　総称文は、集団のランキングを提示した文である。
ⓔ　総称文は、集団への偏見を表出した文である。

問六 傍線部C「二点」とあるが、それを説明したものとして最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 17 。

ⓐ ランキングがあることが差別の正当化になる点と、人以外の生き物を使うことでランキングが簡単にできてしまう点

ⓑ ランクづけることによって、序列関係を成り立たせることができる点と、「ゴキブリ」などの言葉で悪いイメージと結びつけることができる点

ⓒ ランキングすることによって差別が正当化される点と、すでにランクづけられた言葉を使うことで簡単にランキングを成功させられる点

ⓓ ヘイトスピーチによって、差別や慣習が正当化されてしまう点と、すでに人以下のものとしてランキングされている用語を使うことで、ランキングに説得力を持たせやすくなる点

ⓔ ランキングが存在することで差別や暴力を正当化できる点と、強いイメージを喚起する言葉で集団と悪いイメージを結びつけることができる点

問七 空欄 Z に入る語句として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 18 。

ⓐ 邪悪な

ⓑ 空想的な

ⓒ 本末転倒の

ⓓ まっとうな

ⓔ 非凡な

メ　　モ

試験問題は次に続く。

三

次の文章を読んで、**問一**～**八**に答えなさい。

「久しぶりだ。ここ」

部室内の空気に北条は開口した。二年次には美術の履修はなく、春休みを挟んだこともあり、北条は美術室を懐かしがった。室内を見渡す眼球の動きの精密さと、ころころと光を湛(たた)えては逸れてゆく瞳孔を、速水はしげしげと見つめた。顔が清らかな端正さを持つことは言うまでもないが、眼球そのものが美しい人間は、どんな芸能人を思い浮かべても北条の他にいなかった。何かを見ているようで、その実何一つ興味のない瞳は、簡単に人を吸い込み釘(くぎ)付けにした。長くも柔和な印象を与える睫毛(まつげ)が二回三回瞬いてから、北条は速水のほうを流し見た。

「で、どうすればいい？」

「ああ。そこに腰掛けてくれ」

適当な椅子と机のほうを指差すと同時に、速水は室内に山中春美がいることに気がついた。（＊中略）山中は素朴だが深みのある風情を湛えた顔だちだった。背もすらりと高く、豊麗な肉体と背中まで伸びた髪が微妙な調和を生んでいた。A平たく言って美人だが、速水が気に食わないのは、その精神のほうである。幼くも奥ゆかしい顔つきとは裏腹に、彼女はとにかくあらゆるものに興味と関心を移す性分で、空を眺めた時には晴雨だろうが朝夕だろうが、概して「空」として愛していた。そういった適合性を排除した審美観は速水としてはアシュコウできず、彼女の鵞鳥(がちょう)のような陋劣(ろうれつ)な笑い声がきこえると、それでも美術を嗜(たしな)むものかと無意に恥じらいを覚えた。（＊中略）

北条は椅子に掛け「どんなポーズがいい？」と微笑しながらきいた。（＊中略）

「ひとまず、そのまま座ってて」

画材を用意し、遂に念願の肖像画へと着手する。（＊中略）

手法は油彩画と決めていた。下絵を描くために木炭を握ったまま、構図を思案しつつ、北条の姿態を改めて入念かつ精緻に観察した。【①】

北条は美しい姿勢で着席していた。座りながらも優れた彫刻の尊大さすら感じさせ、その実一人の少年としての物憂げさでこの空間そのものすら掌握していた。上履きはまるで汚れておらず、その潔白に包まれたこれまた白色の靴下と、連なる引き締まった脚は、彼の面差しとは異なる雄邁(ゆうまい)さを感じさせた。学生服の黒色に、整った丸い輪郭を与える太腿(ふともも)に置かれた、［V］なまでに白く、生命を削ぎ落として残りうる美しさを肌の真下に忍ばせる手は、なだらかな肩と優美な曲線を感じさせる腕によって、繊細でなめらかな胸板と、ひきしまった骨格を持つ胴から続いていた。目鼻立ちの、運命に苛(さいな)まれているような美貌は思わず息を呑(の)むほどで、傑出した細長い眉、翳(かげ)りのある眼差、優雅な鼻梁(びりょう)、玲瓏(れいろう)たる唇、薄い頬、形の良い耳と造形

美の到達点ともいえる輪郭は、B閑暇を持て余す屹然とした咽仏を含む勇壮な頸に支えられ、端正でありながら精悍であり、その微妙な凜々しさが、トウスイを超えた先にある［　W　］な印象すら与えた。【②】

まさに完全なる美。この美の前ではありとあらゆる事物や人間が、ひれ伏し、その美しさに懇願する他にないという絶対服従を強いるような美。それは絶望に近かった。【③】自分が予期していた壁が、こんなにも厚く高く困難なものであり、［　X　］な美は人に無力感を授けるのだと思い知った。ただ眺めるだけで三十分が経過し、速水はまるで描けなかった。それは外面に対する畏怖の念すら生じうる恐るべき美しさのせいでもあったが、最たる原因は一つだった。【④】あれほど夢想し、はぐらかされ、二週間も待ち焦がれた結果辿り着いたこの瞬間に、それは満足と同時に燃え尽きてしまったのか？　それとも確実な観察を積み重ねることで、未知の美しさはショウサイ*にされ、紐解かれた謎に興醒めしたのか？　違う。速水が北条を観察し続けても、そこにあるのは、外面の美だけであり、初対面の時のような、内面の反映、美徳も悪徳も血液のように身体中を循環するあの凄まじい様態を見出せなくなっていた。北条の美しさは外観だけのはずがないのだ。海の美しさは、決して青さだけではなく、震撼する暗闇もその美しさのはずだ。【⑤】

ならば何故そう思ったのか。理由はすぐに判明した。北条の美しさは外観だけではなく、無関心そのもの。彼の心の有様こそが、速水が描くべき敵であり、今立ち向かいたい完全なる美である。誰かに肖像画を描かれるなどという経験は、会話の端々から北条にとって初めてのことと推察できる。ゆえに北条は一抹の関心を向けた。それは速水に対してでもあるが、どこに向けられるでもない関心だった。「［　Y　］」という関心だ。自他に無頓着な北条は、観察されることを以て初めて自他の距離を知り、あまつさえその距離を計測しようと考えていた。Cそれが致命的だった。芸術の距離を定めるのは、芸術家、もしくは鑑賞家の仕事だ。芸術そのもの、美そのものが定めていい距離など存在しない。

［　Z　］観察しなくては北条の肖像を描くことは叶わないが、観察をすれば無関心の美は喪失される。速水が無形な美を創造するとき、そこには有形なものの観察という前段階を要したのだ。見ることにより発見される美しさは、見られないことが前提となっていた。この難儀には速水の審美観も影響していた。彼は認識により美を創造することを、無意識におこなえるほどに芸術の毒素に冒されていた。言い換えれば、彼は認識なしに芸術を見ることは叶わなかったのだ。

（伊良刹那「海を覗く」による。設問の関係上、本文を改めたところに＊を付した。）

問一　傍線部ア～ウと同じ漢字を含むものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 19 、イが 20 、ウが 21 。

ア　シュコウ

ⓐ シュシャセンタクする
ⓑ 予防セッシュを受ける
ⓒ シュリョウ民族
ⓓ シュセキで卒業する
ⓔ シュビ範囲が広い

イ　トウスイ

ⓐ スイソウガクの演奏を聞く
ⓑ 作戦をスイコウする
ⓒ 局部マスイをかける
ⓓ スイミン時間を確保する
ⓔ 栄枯セイスイ

ウ　ショウサイ

ⓐ 不要な説明はショウリャクする
ⓑ 国会に参考人をショウチする
ⓒ 上司のショウダクを得る
ⓓ イショウを凝らす
ⓔ 経緯をショウジュツする

問二　傍線部A「平たく言って」の意味を言い換えた熟語として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 22 。

ⓐ 率直
ⓑ 正直
ⓒ 簡潔
ⓓ 類似
ⓔ 短縮

問三　次の文は、本文の【①】～【⑤】のどこに入るか。次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 23 。

速水は途端に北条に人生を擲(なげう)つほどの美しさを感じなくなったからだ。

ⓐ【①】
ⓑ【②】
ⓒ【③】
ⓓ【④】
ⓔ【⑤】

問四　空欄 V 、 W 、 X に入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 24 。

ⓐ Vが「病的」、Wが「官能的」、Xが「圧倒的」
ⓑ Vが「絶対的」、Wが「病的」、Xが「官能的」
ⓒ Vが「病的」、Wが「印象的」、Xが「圧倒的」
ⓓ Vが「感情的」、Wが「絶対的」、Xが「印象的」
ⓔ Vが「官能的」、Wが「感情的」、Xが「病的」

問五　傍線部B「閑暇」と**反対の意味**を持つ熟語を、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 25 。

ⓐ　繁忙
ⓑ　寸暇
ⓒ　清閑
ⓓ　余裕
ⓔ　閑散

問六　空欄 Y に入る文として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 26 。

ⓐ　速水はどんな絵を描くのか
ⓑ　自分は今、人に観察されている
ⓒ　絵のモデルになるというのはどんなことか
ⓓ　速水は何を考えているのか
ⓔ　どんな肖像画ができるのか

問七　傍線部C「それが致命的だった」とあるが、そのように考える理由として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 27 。

ⓐ　北条の持つ完全な美は、あらゆるものに絶対服従を強いるようなものであり、観察者の権限など到底及ばないものであるから。
ⓑ　北条の持つ美は人に無力感を授けるものであり、観察者の意欲を奪ってしまうことで、対象との距離を奪ってしまうから。
ⓒ　北条を観察できたことで、速水の中にある対象への距離感が失われ、以前のように北条に美を感じられなくなってしまったから。
ⓓ　速水が描きたかったのは北条の内面の美しさであり、北条との距離が喪失することで、それを感じられなくなってしまったから。
ⓔ　肖像画を描かれると意識することで、北条が持っていた無関心によって生ずる美が失われてしまうから。

問八　空欄 Z には、次の①～⑥の各文が入る。正しい順に並べるとすれば、どれが最も適切か。次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、28 。

① 彼はただ速水の命に従ったまでである。
② そのことを速水は自覚していた。
③ 観察が犀利（さいり）であればあるほどに、美は見る間に埋没した。
④ だが北条に非はない。
⑤ かといって美を創造する認識を怠っては、この挑戦の意義は消え失せる。
⑥ 問題は速水が観察をしてしまったことである。

ⓐ	ⓑ	ⓒ	ⓓ	ⓔ
①	⑤	①	④	④
↓	↓	↓	↓	↓
②	②	⑤	⑤	①
↓	↓	↓	↓	↓
⑥	⑥	④	①	⑥
↓	↓	↓	↓	↓
④	③	②	⑥	②
↓	↓	↓	↓	↓
⑤	④	③	②	③
↓	↓	↓	↓	↓
③	①	⑥	③	⑤